

## 資料

## 看護学生の終末期ケア教育に関する文献検討

初見 温子・高岡 哲子

(2023年1月10日受稿)

## I. はじめに

日本の平均寿命は主要国の中でも高く<sup>1)</sup>、多死時代に突入していると言われている<sup>2)</sup>。1977年に病院死亡者数が在宅死亡者数を超えて以来、病院死亡者の割合は2006年に79.8%のピークを示し、その後わずかに減少傾向にはあるが2019年においても71.3%と高い水準を示している<sup>3)</sup>。これは、アメリカが29.8%やイギリスが46.0%である<sup>4)</sup>ことと比較しても、多いことが特徴としてあげられる。2040年には死亡者数が1,679,000人とピークを迎える<sup>5)</sup>ことが予測されていることから、国は医学的知見に基づき回復の見込みがないと判断した場合には、高齢者が住み慣れた自宅や介護保険施設等での看取りが可能になる体制を整えることを推進している。また、日本財団<sup>6)</sup>の調査によると、高齢者の58.8%が最期を迎える場所として自宅を希望している。このように人生の最期の迎え方のニーズが多様化している現状にも関わらず、「死」が身近に無いわが国の現状では、多様な人の「死」のあり方について考える機会を十分に持つことの無い看護学生が多いと推察する。カリキュラムとして様々な看取りのあり方を模索し、対象者が満足いく最期を迎えるための支援ができる看護師を育成するためには、どのような教育が必要であるのかを検討することが必要であると考える。看護学生の終末期ケア教育に関する研究動向を把握することを目的として文献検討を行った。

本研究の目的は、終末期ケア教育に関する研究動向を概観するとともに、看護基礎教育における終末期ケア教育の課題を明らかにすることである。

る。

## II. 方法

## 1. 対象となる文献の抽出

医学中央雑誌Web版で2022年6月に、2012年～2022年の範囲で検索を行った。key word「ターミナルケアor看取り」「看護基礎教育」で「and」検索を行い、「原著論文」で絞り込みを行った。検索の結果、得られた文献は30件であった。そのうち、研究方法が明確でない文献、研究内容が終末期ケアに関するものではない文献を除外し、23件を分析対象とした。

## 2. 分析方法

23件の文献を、マトリックス方式<sup>7)</sup>で整理し、全体を概観した。文献を精読して中心テーマはコード化した。抽出されたコードを意味内容の類似性に合わせてカテゴリー化した。

## III. 結果

## 1. 文献の概要

文献の概要を表1に示す。文献の掲載年別数は「2017年」が5件(21.7%)と最も多かった。次いで、「2014年」と「2018年」が3件(13.0%)であった。筆頭著者所属はすべて「看護学」であった。研究方法は「質的研究」が9件(39.1%)と最も多く、次いで「量的研究」と「混合研究」が各7件(30.4%)であった。

質的研究では、質問紙への自由記載やインタビューの逐語録から、看護学生や看護師が終末期ケアにおいて感じている困難や思い、教育のニ-

ズが分析されていた<sup>8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)</sup>。また教科書教材の記述の文脈分析<sup>15)</sup>や、視聴覚教材や講義などによる教育後の学生レポートの分析<sup>16) 17) 18) 19) 20)</sup>があった。量的研究では、終末期ケアに関する経験や傾向<sup>13) 21)</sup>、教育ニーズ<sup>11)</sup>、教育実態<sup>8) 14)</sup>、視聴覚教材や講義、臨地実習などの教育によ

る学生の死生観への影響やその要因<sup>16) 22) 18)</sup>、終末期シミュレーション教育の効果<sup>23)</sup>、看護師の終末期がん患者ケアに影響する要因<sup>24)</sup>、看護教員の死後の教育に対する姿勢に影響する要因<sup>25)</sup>、などについての文献があった。

## 2. 対象者および協力者

表1に対象者および協力者を示した。「看護学生」を対象とした研究が15件(65.2%)と最も多かった。3年次、4年次の学生を対象とした研究が9件(39.1%)と最も多く、1年次の学生を対象とした研究は4件(17.4%)であった。全学年を対象とした研究は1件(4.3%)であった。

「看護師」を対象とした研究は5件(21.7%)で、「教員」を対象にした研究は2件(8.7%)あり、教育ニーズや、終末期ケア教育の現状と課題について明らかにしたものであった。

## 3. 文献の中心テーマ

中心テーマを表2に示す。以下にカテゴリ【(2次コード数)】、2次コード<<(1次コード数)>>、1次コード<>を示す。カテゴリは【看護学生の終末期ケア経験(5)】、【看護師の終末期ケア意識(4)】【看護学生への終末期ケアの教育実態(3)】の3つが抽出された。

### 1) 看護学生の終末期ケア経験

【看護学生の終末期ケア経験(5)】は、<<学生

表1 文献の概要

		N=23		
		文献数	%	
掲載年	2012	2	8.7	
	2013	2	8.7	
	2014	3	13.0	
	2015	2	8.7	
	2016	1	4.3	
	2017	5	21.7	
	2018	3	13.0	
	2019	1	4.3	
	2020	2	8.7	
	2021	2	8.7	
筆頭著者所属	看護学	23	100.0	
研究方法	量的研究	7	30.4	
	質的研究	9	39.1	
	混合	7	30.4	
対象者・協力者	看護学生	1年次	4	17.4
		2年次	1	4.3
		3年次	5	21.7
		4年次	4	17.4
		全学年	1	4.3
	看護師	臨床看護師	4	17.4
		臨床指導者	1	4.3
	教員		2	8.7
教材		1	4.3	

表2 中心テーマ

			N=23	
カテゴリ	2次コード	1次コード	文献数	%
看護学生の終末期ケア経験(5)	学生の思い(2)	終末期医療への思いの特徴	1	4.3
		患者の死を経験した看護学生の思いの特徴	1	4.3
	学生の関わり(1)	終末期がん患者との関わりの特徴	2	8.7
		死に関する経験の実態と死生観との関連	1	4.3
	学生の経験と死生観(2)	臨地実習前の看護学生の死に関する経験と死生観の実態	1	4.3
		学生の学習動機(1)	終末期看護に関心を持つ動機	1
看護師の終末期ケア意識(4)	学生の道徳的発達(1)	生命の大切さに関する道徳的発達の特徴	1	4.3
		看護師の教育ニーズ(1)	看護師の終末期ケア教育に対するニーズの実態	2
	看護師の思い(1)	新人看護師の死に対する意識の特徴	1	4.3
		看護師のケア実態(1)	終末期がん患者への看護師のケア態度の特徴	1
	看護師の学生への指導実態(1)	臨地実習指導者の生命倫理経験と学生への指導状況の関連	1	4.3
	看護学生への終末期ケアの教育実態(3)	教育の効果(3)	視聴覚教材・死の疑似体験・講義の教育効果	1
シミュレーションシナリオ教育の効果			1	4.3
緩和ケアに関する講義の学習効果			1	4.3
学びの内容(4)		視聴覚教材による学びの内容	1	4.3
		グループケアに参加した看護学生の学びの内容	1	4.3
		臨死期におけるスピリチュアル体験授業による学びの内容	1	4.3
教育内容の実態(3)	終末期をテーマにした世代間交流ゼミによる学びの内容	1	4.3	
	エンドオブライフケアに関するテキスト教材の分析	1	4.3	
	看護師養成機関の終末期ケア教育実態	1	4.3	
	教員の終末期ケア意識と死後の処置教育実施状況の関連	1	4.3	

の思い (2) ≫ ≪ 学生の関わり (1) ≫ ≪ 学生の経験と死生観 (2) ≫ ≪ 学生の学習動機 (1) ≫ ≪ 学生の道徳的発達 (1) ≫ で構成されていた。≪ 学生の思い (2) ≫ は < 終末期医療への思いの特徴 > < 患者の死を経験した看護学生の思いの特徴 > で構成されていた。≪ 学生の関わり (1) ≫ は < 終末期がん患者との関わりの特徴 > で構成されていた。≪ 学生の経験と死生観 (2) ≫ は < 死に関する経験の実態と死生観の関連 > < 臨地実習前の看護学生の死に関する経験と死生観の実態 > で構成されていた。≪ 学生の学習動機 (1) ≫ は < 終末期看護に関心を持つ動機 >、≪ 学生の道徳的発達 (1) ≫ は < 生命の大切さに関する道徳的発達の特徴 > で構成されていた。

## 2) 看護師の終末期ケア意識

【看護師の終末期ケア意識 (4)】は、≪ 看護師の教育ニーズ (1) ≫ ≪ 看護師の思い (1) ≫ ≪ 看護師のケア実態 (1) ≫ ≪ 看護師の学生への指導実態 (1) ≫ で構成されていた。≪ 看護師の教育ニーズ (1) ≫ は < 看護師の終末期ケア教育に対するニーズの実態 > で構成されていた。≪ 看護師の思い (1) ≫ は < 新人看護師の死に対する意識の特徴 > で構成されていた。≪ 看護師のケア実態 (1) ≫ は < 終末期がん患者への看護師のケア態度の特徴 >、≪ 看護師の学生への指導実態 (1) ≫ は < 臨地実習指導者の生命倫理経験と学生への指導状況の関連 > で構成されていた。

## 3) 看護学生への終末期ケアの教育実態

【看護学生への終末期ケアの教育実態 (3)】は、≪ 教育の効果 (3) ≫ ≪ 学びの内容 (4) ≫ ≪ 教育内容の実態 (3) ≫ で構成されていた。≪ 教育の効果 (3) ≫ は < 視聴覚教材・死の疑似体験・講義の教育効果 > < シミュレーションシナリオ教育の効果 > < 緩和ケアに関する講義の学習効果 > で構成されていた。≪ 学びの内容 (4) ≫ は < 視聴覚教材による学びの内容 > < グリーフケアに参加した看護学生の学びの内容 > < 臨死期におけるスピリチュアル体験授業による学びの内容 > < 終末期をテーマにした世代間交流ゼミによる学びの

内容 > で構成されていた。≪ 教育の実態 (3) ≫ は < エンドオブライフケアに関するテキスト教材の分析 > < 看護師養成機関の終末期ケア教育実態 > < 教員の終末期ケア意識と死後の処置教育実施状況の関連 > で構成されていた。

## IV. 考察

### 1. 文献の概要

表1に示したように、文献数は2017年が5件 (21.7%) と最も多かった。

2011年に文部科学省が開催した大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会<sup>26)</sup>で、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」が提示された。看護実践を構成する20の看護実践能力の1つとして、「終末期にある人々を援助する能力」が到達目標として設定され、終末期ケア教育にも重点をおくことが求められ始めたと考える。数年かけて終末期ケア教育が実践され、その実態や評価に関する研究が増えてきたのが2017年にあたるのではないかと推察する。

2040年の死亡者数ピークに向けて、終末期ケア教育は、重要な教育、研究課題であり続けると考えられるため、今後、文献数の増加が予測される。

### 2. 対象者および協力者

対象者および協力者は、「看護学生」を対象とした研究が15件 (65.2%) と最も多かった。このうち3年次、4年次の学生を対象とした研究が、合わせて9件 (39.1%) と多かった。終末期ケア教育の卒業時到達目標<sup>26)</sup>では、終末期の全人的苦痛を軽減・緩和し、死にゆく人の意思を支え、その人らしくあることを援助する能力が求められており、高い技術や自らの看護観・死生観の醸成なくして学ぶことが難しい分野であることから、履修を3、4年次に設定している教育機関が多いと考えられる。終末期ケア教育の実態把握や評価のためには、3、4年次の学生が対象者として適しており、教育前後での比較や、教育前の準備状況、学生観を把握するために、1年次や全学年の

学生が対象として選択されていた研究もあったと考えられる。

「看護師」を対象とした研究は5件(21.7%)であった。看護基礎教育で、終末期にある人々を援助する能力を修得できたかどうかは、学生を対象にするだけでは測りきれないと考えられる。よって、卒業後の看護師も対象として、終末期ケアの能力や態度を測る研究や、看護基礎教育での終末期ケア教育ニーズを把握する研究が行われていたと考えられる。

### 3. 文献の中心テーマ

#### 1) 看護学生の終末期ケア経験と思い

【看護学生の終末期ケア経験(5)】の《学生の思い(2)》に含まれる、〈終末期医療への思いの特徴〉〈患者の死を経験した看護学生の思いの特徴〉は、患者の死を経験した学生の感情として、「死に対する不安や恐怖と無力感」「患者の死を受け入れることの葛藤と覚悟」「患者の死と自分の家族の死を重ねる」など、死を受け入れることに困難を感じている事が明らかにされていた。このことは、久保木・崎山ら<sup>27)</sup>が、患者の死を経験した看護学生は実習終了までの時期に最もマイナス感情を感じ、普段の感情に戻るまで1カ月以上かかるパターンがあることを明らかにしたこととも共通点があり、終末期ケア教育において、継続して存在している課題と推察される。また、《学生の関わり(1)》の〈終末期がん患者との関わりの特徴〉で学生は、患者とのコミュニケーションの困難さを抱えていたことが明らかにされていた。このような看護学生が抱く死や、死にゆく人との関係性の構築における困難な感情に対応するためには、事前に死を肯定的に捉えられるような死生観に触れる機会が重要であると考えられる。

《学生の経験と死生観(2)》に含まれる〈死に関する経験の実態と死生観の関連〉では、看護学生の実態として、86.5%の学生が身近な人との死別体験があることが明らかにされていた。しかし、死別体験の有無だけでは、死生観に関連が見られないことが明らかにされている<sup>28)</sup>ことから、

死別体験を有する学生が多いことだけを捉えて終末期患者ケアに向けた学生の準備状況を鑑みることが難しく、患者の死別に深く関わる可能性のある臨地実習前の準備教育として適した教育方法、内容の検討が求められていると考える。今回分析対象とした文献のなかでも〈臨地実習前の看護学生の死に関する経験と死生観の実態〉では、看護学生の死生観を育成していくためには、死生に関する体験も必要だが、死に関する講義・演習を通しての学びや、自身の考えを他者と共有する機会をもつことが必要であることが明らかになっていった<sup>22)</sup>。学生の死生観と関連して、《学生の道徳的発達(1)》〈生命の大切さに関する道徳的発達の特徴〉として入学時の看護学生は、道徳的判断を行う上で何が重要か考える一定の道徳判断の発達水準にはあるが、今後、人間関係を中心とした倫理的感受性を高める教育的関わりが求められることが挙げられていた<sup>21)</sup>。また、《学生の学習動機(1)》では〈終末期看護に関心を持つ動機〉として、他の学生から聞いた実習での終末期看護経験、講義を通して得た終末期看護の学び、が示されていた<sup>29)</sup>。実習内外での経験以外に、講義や他の学生から聞いた話などが含まれており、経験以外の学習を充実させることも、看護学生の終末期ケア教育において有効であると考えられた。

#### 2) 看護師の終末期ケア意識

【看護師の終末期ケア意識の実態(4)】では、《看護師の教育ニーズ(1)》《看護師の思い(1)》《看護師のケア実態(1)》から、新卒看護師は、終末期患者・家族とのコミュニケーションや自分自身の感情のコントロールに対して難しさを感じており、看護基礎教育へのニーズは、看護の理念(看護倫理)および哲学(死生観)に関する教育ニーズが高いことが明らかにされていた<sup>30)</sup>。理念や哲学に関する学習では、座学における学習の工夫が必要であることが示唆されていると考える。また、《看護師の学生への指導実態(1)》では、臨地実習指導者の生命倫理に関する学生指導状況は「経験がない」が58.1%最も多

く、生命倫理に関する指導は「説明が難しい」の18.6%が最も多かった<sup>14)</sup>。この研究からも、看護学生が臨地実習経験から終末期ケア教育を受ける機会の少なさや難しさが示唆された。

### 3) 看護学生への終末期ケアの教育実態と教育効果

【看護学生への終末期ケアの教育実態 (3)】として、《教育内容の実態 (3)》では、〈看護師養成機関の終末期ケア教育実態〉で、全ての学校で座学の終末期ケア教育を実施していたが、教員は、学修内容精選や実習指導体制に課題を感じていた<sup>8)</sup>との報告から、終末期ケア教育においては、教える側も、具体的な教授内容や方法に困難感や課題を感じている状況であることが明らかになった。

《学びの内容 (4)》《教育の効果 (3)》では、〈視聴覚教材による学びの内容〉〈グリーフケアに参加した看護学生の学びの内容〉〈臨死期におけるスピリチュアル体験授業による学びの内容〉〈終末期をテーマにした世代間交流ゼミによる学びの内容〉〈視聴覚教材・死の疑似体験・講義の教育効果〉〈シミュレーションシナリオ教育の効果〉〈緩和ケアに関する講義の学習効果〉で、臨地実習以外の終末期ケアに関する教育の実践内容やその効果についての報告が見られたが、各1件であった。

以上から、看護学生への終末期ケア教育では、様々な内容、方法の教育が実施されているが十分に検討されておらず、学修内容の精選に困難や課題を抱えている状況であり、今後さらなる検討が必要であると判断した。

### 4. 看護学生の終末期ケア教育への示唆

終末期ケア教育において看護学生が実習等の経験から学ぶことは重要であるが、実際に実習で学ぶことのできる機会は少ないことが明らかになった。その中で、患者の死を経験した学生は、死に対するネガティブな感情や、終末期患者とのコミュニケーションで困難な感情を伴うことがあり、普段の感情に戻るまで1カ月以上かかるパターンがあることが明らかになっていた。このこ

とから、学生に対してもグリーフケアが重要であり、実習後数か月かけて定期的にフォローアップすることが望ましいと考える。

また、身近な人の死を経験していた学生は86.5%であったが、他人の死を経験することは少ないと推測され、日本人はネガティブな死生観をもつ傾向にあることから、実習前に肯定的な死生観に触れることは、患者の死を経験した学生が普段の感情に戻る期間を早めることにつながると考える。教育ニーズの高かった倫理や哲学の分野から学際的な意見を取り入れながら、肯定的な死生観の醸成につながる教育内容や方法について検討を重ね、多様化する終末期ケアや看取りの場面において看護の独自性を発揮しながら貢献できる看護師を育成することが必要であると考えられる。

## V. おわりに

本研究の結果、看護学生の終末期ケア教育に関する研究動向について、以下のことが明らかになった

- ・分析対象となった23件の文献から抽出されたカテゴリーは【看護学生の終末期ケア経験 (5)】、【看護師の終末期ケア意識 (4)】、【看護学生への終末期ケアの教育実態 (3)】であった。
- ・終末期ケア教育では、経験から学ぶ重要性が示されていたが、その機会は少なく、看護学生には困難な感情を伴うものであることが明らかになっていた。このため、学生に対するグリーフケアの実施と肯定的な死生観の醸成が終末期ケア教育において重要であるが、経験のみでは補えないことから、臨地実習経験以外で学生の学びにつながる具体的な教育方法や内容をさらに検討する必要性が示唆された。

## 文 献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所：2022年版人口統計資料集 V. 死亡・寿命 図5-3 主要国の平均寿命1950年～最新年次. [https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P\\_](https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_)

- Detail2022.asp?fname=G05-03.gif (アクセス日: 2022年7月21日)
- 2) 大原正樹, 占部秀徳, 花戸貴司, 東條環樹, 阿部美保: 多死時代の在宅終末期医療と看取りの文化. 地域医療, 56(1): 6-21, 2018.
  - 3) 厚生労働省: 厚生統計要覧(令和2年度)第1編人口・世帯 第2章人口動態. [https://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk\\_1\\_2.html](https://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_1_2.html), (アクセス日: 2021年11月13日)
  - 4) Cross SH, Warraich HJ: Changes in the Place of Death in the United States. N. Engl. J. Med. 381(24): 2369-2370, 2019.
  - 5) 内閣府: 令和3年版高齢者白書. [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf), (アクセス日: 2021年11月13日)
  - 6) 日本財団: 人生の最期の迎え方に関する全国調査結果, <https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2021/20210329-55543.html> (アクセス日: 2022年2月7日)
  - 7) ジュディス・ガラード著・阿部陽子訳, 2015, 看護研究のための文献レビュー マトリックス方式. 医学書院.
  - 8) 黒田真由美, 常盤文枝, 川畑貴美子: 看護基礎教育における最期まで生きることを支える教育の現状と課題. ホスピスケアと在宅ケア, 27(3): 261-270, 2019.
  - 9) 長尾匡子: 新人看護師が有する高齢患者の看取りについての意識. ホスピスケアと在宅ケア, 25(2): 96-102, 2017.
  - 10) 阿部容子, 今村 嘉子, 袋文子: 終末期実習において患者の死を経験した学生の感情と学びの様相. 国立病院看護研究学会誌, 13(1): 66-73, 2017.
  - 11) 糸島陽子, 奥津文子, 荒川千登世, 本田可奈子, 大門裕子, 前川直美, 霜田求, カール・ベッカー: 新卒看護師・看護師長のエンドオブライフに対する教育ニーズ. 人間看護学研究, 12: 25-32, 2014.
  - 12) 飯野京子, 小山友里江, 長岡波子, 河原林弘恵, 岩爪美穂, 成田綾子: 看護学実習におけるがん患者とのコミュニケーションの体験. 国立看護大学校研究紀要, 13(1): 55-61, 2014.
  - 13) 内山久美, 久木原博子, 二重作清子, 浅田有希, 原理恵: 看護大学生の臨地実習前の死生観. 看護・保健科学研究誌, 13(1): 104-113, 2013.
  - 14) 川本起久子, 柴田恵子: 臨地実習指導者の生命倫理に関する経験と学生指導状況. 第42回日本看護学会論文集: 342-345, 2012.
  - 15) 鶴若麻理, 長瀬雅子: 看護基礎教育のテキスト教材において意思決定支援が記述されている文脈 エンドオブライフに焦点をあてて. 日本エンドオブライフケア学会誌, 5(1): 53-65, 2021.
  - 16) 高山蓮花: 看護学生の終末期看護教育における学習効果 映画「おくりびと」と死の疑似体験から. 四国医療専門学校紀要, 2: 5-10, 2021.
  - 17) 高山 蓮花: 看護学生の終末期ケア教育における学習効果 映画『おくりびと』を通して. 四国医療専門学校紀要, 1: 1-5, 2020.
  - 18) 早川りか, 堀智子, 森谷和代: 大学生への看護基礎教育における在宅緩和ケア授業の学習効果に関する研究 訪問看護師による特別講義後の学生へのアンケート調査の検討. ホスピスケアと在宅ケア, 25(2): 116-122, 2017.
  - 19) 菅原千恵子, 二瓶洋子: グリーフケア活動に参加した看護学生の学び 家族との死別経験や看取り経験をした遺族から. 第46回日本看護学会論文集: 115-118, 2016.
  - 20) 出村由利子, 大谷順子, 岡田初恵: 看護大学におけるスピリチュアルケアの体験授業の効果 老年看護学の臨死期看護(3年次). 看護教育研究学会誌, 7(2): 13-23, 2015.
  - 21) 土井英子, 小野晴子, 谷口さゆり, 氏平 美智子: Defining Issues Testを用いた入学時看護学生の道徳判断の現状 ケアの倫理と正義の

- 倫理の論争に伴うジレンマストーリーを用いて。インターナショナルNurs Care Res, 11 (4) : 183-192, 2012.
- 22) 長谷川幹子, 安福真弓, 重年清香, 阿部真幸, 板東正己, 道廣睦子: 看護系大学4年生の死生観に影響する要因に関する研究. 医中誌略 インターナショナルNurs Care Res, 19 (1) : 137-145, 2020.
- 23) 玉木朋子, 犬丸杏里, 横井弓枝, 富田真由, 木戸倫子, 大野ゆう子, 辻川 真弓: 看護基礎教育における終末期ケアシミュレーションシナリオの開発と評価 フロー体験チェックリストを用いた無作為比較試験による検討. 日本看護科学会誌, 37: 408-416, 2017.
- 24) 池内祥子, 福間美紀, 長田京子: 一般病棟の看護師のがん患者に対する終末期ケア態度とグリーフワークの関連. 島根大学医学部紀要, 40: 59-67, 2018.
- 25) 平野裕子, 林文, 白土辰子, 小島ひで子: 基礎教育における死後の処置教育と死後の処置を教える教員の終末期ケアおよび死に対する態度. 死の臨床, 36 (1) : 169-174, 2013.
- 26) 文部科学省: 看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書, [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1307329\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1307329_1.pdf) (2022年12月19日アクセス)
- 27) 久保木優佳・崎山栄子: 受け持ち患者の看取りを経験した看護学生の感情変化のプロセスとその要因. 第38回日本看護学会論文集: 36-38, 2007.
- 28) 松下姫歌, 尾形綾: 死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 58: 159-168, 2009.
- 29) 小濱優子, 滝島紀子, 武内和子: 終末期看護への学習意欲を高める要因の検討 卒業前の看護学生への調査から. 川崎市立看護短期大学紀要, 19 (1) : 49-56, 2014.
- 30) 川原礼子, 齋藤美華, 佐々木明子: 看護職が高齢者の「予想される死」において「呼吸停止確認」を担う場合における看取り教育へのニーズー介護老人保健・福祉施設に勤務し、「呼吸停止確認」に賛成する当該職種への調査から. 老年看護学, 22 (1) : 123-130, 2017.

